

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ



上野村はいま



群馬県の西南端、神流川上流にある上野村は1985年、日航機墜落事故で一躍有名になった。あれから25年。道路が整備され、藤岡市から神流川沿いにくねくねと伸びていた道路があちらこちらでまっすぐになり、慰霊の旅もずいぶんと楽になった。とはいえやはり上野村は山の中。人口は減り続け、過疎の村になりつつある。

そこに事故の7年後、かじかの里学園が誕生した。悲しい記憶とは無縁の子どもたちの明るい声が飛び交い、都会では経験できない豊かな生活が繰り広げられているという。ここは上野村が開設した山村留学の基地。春まだ浅き4月初旬、入園式の様子を取材するために出かけた。

下仁田ICからが便利

前橋からは関越自動車道と上信越自動車道を利用、下仁田ICを降りて南牧村に入り、峠の湯ノ沢トンネルをくぐるともうそこは上野村。1時間と少しのドライブで着いてしまう。もちろん、藤岡市から神流町（万場町と中里村が合併して誕生した町）を経由して入ることも可能だ。藤岡方面から神流川を遡ってくると順に、新羽（にっば）地区に上野小、川和地区に村役場があり、上野中やかじかの里学園はもっとも奥の楢原地区にある。



日航機事故の犠牲者のための慰霊の園は川の反対側の高台にある。

入園式

午後1時30分、来賓や保護者、関係者が待つ紅白幕の囲まれた会場に13人の入園者が入ってきて背もたれのない木製の椅子に座る。司会者が「入園者、保護者、自己紹介」と告げると、順番に前に出て名前、出身地、学年、好きな科目、目標などを語る。



入園式のパンフレットのイラスト

- ◆新潟市からきました。得意なことは絵を描くことです。初めは迷惑をかけると思いますがよろしくをお願いします。
- ◆栃木県からきました。好きなスポーツは野球です。ここで行う行事はみな楽しみです。よろしくをお願いします。
- ◆東京都からきました。好きなスポーツはサッカーです。嫌いなスポーツは野球です。これからよろしくをお願いします。
- ◆神奈川県からきました。中学1年生になりました。好きなことは友達といっしょにおもしろいことを話し合っって笑いあっていることです。スポーツをしたりすることが好きです。
- ◆千葉県からきました。趣味は読書と絵を描くことです。上野村は自然に囲まれているので、自然の中で楽しく過ごしたいです。よろしくをお願いします。
- ◆中学一年生になりました。体験にきたときにテレビとかないんだと思いました。体験で外で鬼ごっこかするのが楽しくなりました。

子どもたちの表情は明るい。楽しそうに語る。彼らはすでに3泊4日の体験入園で生活を共にした仲間たちなのだ。しかし、仲間や保護者、来賓の前で語ることは緊張感もともなう。終わって席に戻るときは子どもも大人も顔に笑みがこぼれる。

原則1年の入園期間だが、中には継続して2年目を迎える生徒もいた。

- ◆継続二年目になる中2のユミカです。今期は13人の園生のほとんどが新規生で継続生はその中の3人だけです。継続生である私たち中学生3人で新しい人たちに学園の良さとか、伝えていきたいと思います。一年間よろしくをお願いします。

彼女は実に堂々と挨拶をした。保護者の自己紹介の中にはいろいろと事情があることをうかがわせるものもあった。新潟市からきたお母さんは入園式が終わったあと、インタビューに応じてくれた。

◇高校で教師をしています。教科指導、部活指導などで忙しい。ほとんど土日にも家にいません。子どもが学校から帰ると家で一人での生活を続けてきました。人とかかわる機会がないことも心配だし、規律が身に付かないことも心配でここで生活することになりました。集団生活が良いことばかりでないということは分かっていますが、この子にとってはあこがれの集団生活です。

◆村上園長に聞いてみました。

Q: 学園設立の経緯は？



A:上野村が山村留学を決断したのは、高度経済成長で若者の流出と過疎化が進み、小・中学校とも1校に統合となり、更に少子化現象で児童数が減少、複式学級の出現も予想されるようになった20年前です。村の子ども達の間での競争心や社会性が低下する事が懸念されるようになりました。その一方で自然環境の乏しい都会の子ども達に自然と共に生きる体験をさせ、自然のありがたみ・尊さを理解

できる大人になって欲しいという思いや村の子ども達に良い刺激を与え、お互いの良さを活かし合い学んで欲しいという願いもありました。それらの思いが学園誕生につながりました。

Q:学園生活の実態は？

A:当学園は開園当初から、豊かな自然を舞台に様々な自然体験活動を実施し、自然とのつきあい方を学んでいます。主な活動は、キャンプ、川遊び、裏山探検などの野外活動。木工、陶芸、草木染めなどの創作活動。農作業や家畜の世話などの労働体験。和太鼓の演奏や楽器演奏などの表現活動などがあります。また、異年齢集団でお互いに助け合い、自らの日常生活全て（掃除、洗濯、炊事など）に自分たちの力で挑戦しながら暮らしています。特に食に関しては家畜（山羊・ニワトリ）の糞尿を畑に入れ、そこで栽培した野菜を調理し、食卓にあげる。残った野菜くずや残飯を家畜に還していくようにし、食の循環を目に見える範囲内で身をもって学習できるシステムになっています。

かじかの里学園 一日の流れ	
6:00	起床 当番活動（掃除、食事作り、家畜の世話）
7:00	朝食・片付け
7:50	登校（中学生は徒歩、小学生はバス）
学 校	
18:00	食事作り
19:00	夕食・片付け 入浴・子どもミーティング
21:30	小学生就寝
22:30	中学生就寝
23:00	完全消灯

Q:子ども達はどのように成長しますか？

A:こうした活動から、子ども達は自立心や思いやり、助け合いの心を育み、真の意味での『命の大切さ』を知り、『生きる力』を養っています。別の観点からでは、家族と離れて暮らすことであらためて親のありがたみを知り、これまで自分を支えてくれてきた存在に対して心から感謝の念を抱くようになります。

テレビ・携帯・マンガのない生活が始まる

過疎の進む村の悩みと、都会生活がもたらす子どもの問題とを山村留学で乗り越えようとする取り組みのようです。そして学園生活はまさに自然の中でのそれ。豊かに見えるけれど、多くの子どもの当たり前のように接してきたテレビ、テレビゲーム、マンガ、携帯電話といった道具と切り離された生活が始まるのです。そのような生活の中で子ども達は確実に成長すると村上園長は語ります。



Q:勉強はどうするのですか？

A:日中地元の上野小中学校に通い、学業のみならず、部活動や委員会活動などでも村の子と一緒に協力し合い、切磋琢磨しています。小さな村では小規模校の活性化が直接、村の活性化につながっているのです。

Q:地域の人たちとのつながりは？

A:村内においても村の行事（お祭り事、体育祭フォーラムから寄贈され特別に許可されたマンガ版源氏 勳にも積極的に参加し、地域の方から暮らしの知恵と技を学ばせていただいています。村の方に来園していただく『語り部』の場を設け、直接お話を伺ったり、一緒に刃物の研ぎ方を教わったりもしています。いつでも座学に留まらず、実際にカラダを動かして学ぶ事を大切にしています。」

Q:子どもたちに入園を決意する覚悟が本当にできるのでしょうか？

A:入園する子ども達は、事前合宿という3泊4日のプログラムに参加し、その後の面接で審査を受けます。親元を離れ自分のことは自分でやっていく為、本人と父母の強い意志が要求されます。実際、面接時でも「上野村:かじかの里に来たら〇〇をやりたい」というチャレンジ精神あふれる言葉が出てきます。友達をたくさん作りたい。川遊びで魚と一緒に泳ぎたい。料理をできるようになりたい。たき火を思う存分やってみたい、など。子ども達にとって1年間は長丁場だけれど、幾多の経験が大きく心もカラダも成長させるのです。

かじかの里学園 一年間の主な行事	
4月	畑作業 はし作り・陶芸 村内散歩
5月	十石市（村の春祭り）洞窟探検
6月	村の子との交流体験 田植え体験 イノブタ石鱈作り 郷土料理
7月	キャンプ 村内登山 川遊び松葉サイダー作り 天体観察・ナイトハイク
8月	夏祭り O B・O G 同窓会
9月	塩ノ沢獅子舞見学 八ヶ岳宿泊登山 草木染め
10月	砥石探し 稲刈り体験 ふるさと祭り
11月	クライミング 石窯ピザ・パン焼き ゲートボール交流会 太鼓コンクール
12月	スケート 雑穀料理 クリスマス会
1月	カルタ大会 どんど焼き 裏山探検
2月	スキー 修園制作 みそ作り 餅つき
3月	ソロキャンプ



学園生が一年間生活する部屋。ここは男子4人。

Q:保護者はどのように関わるのですか？

A:学園生の保護者が組織する『父母会』の活動も村と学園の活性化に大きく関わっています。『父母会』は学園行事や学校PTA行事、教育委員会や村の行事にも参加いただいています。父母のみならず、兄弟や祖父母と家族ぐるみのお付き合いとなるのです。村民の側からこういった参加を大歓迎し、来村する側も距離が遠く大変な面もありますが、第二の故郷とも思えるような豊かな自然に包まれて癒されリフレッシュされて帰ります。地域

住民との交流は年々親睦を増し、地域の方々にも山村留学に対する認識を深めていただいています。卒園生はOB会を組織し、こちらもまた学園を支えてくれる存在になっています。20周年を迎える今年は記念事業の企画もあり、村に対する恩返しができるような活動を今後も展開していくつもりです。

継続入園生の声

上野村に来て

松本 実樹(中学二年生)

私は上野村で初めて一年間、親元を離れて暮らしました。上野村はすごくいい所で、知らない人でも明るくあいさつしてくれます。みんなやさしく、いつも笑顔です。私は、ここに来てあいさつが自分から、もっと身近に幅広くできるようになってよかったです。あと、かじかの里学園という寮では友達と楽しく過ごすことができました。サッカーをしたり、音楽を聴いたり、とても充実した一年になりました。家でできなかった料理ができるようになったり、時間を見て行動できるようになってうれしかったです。今年、寮でのリーダーとして、中学校での先輩として、もっとがんばっていきたいと思います。

上野村の良い所

大嶋 優美香(中学二年生)

私は上野村の山村留学で、上野村の特徴や村民の生活も知ることができました。

初めて来た時、とてもキレイなのでビックリしました。しかも、山々に囲まれていて、人口が少なく標高が高いところに村があります。

上野村に一年間住んで、学校で中3の人が卒業したときにとても感動して涙が出ました。

地元だったら人数が多くて、あまりピンとこないけれど、上野村だと人口が少ないというデメリットのおかげで数少ない中学校の方と深い関わりが持てるんだなと気づき、上野村には上野村にしかない良い所がいっぱいあるんだと思いました。



松本実樹さん 大嶋優美香さん

継続園生は3人でしたが、入園式の後片付けの様子を見て「さすがは先輩」と感心させられました。指導員なしの13人の園生だけで紅白幕を外し、椅子やテーブルを片付ける作業を指揮するのは継続園生3人でした。知らない人がみたらきっと3人のことを指導員と勘違いしたでしょう。



継続生を中心に全員で入園式の後片付

卒園生指導員しょうへいさん

かじかの里学園1期生の仲地さんは卒園後、園の指導員になりました。園生としての生活と指導員としての生活について語っていただきました。

かじか魂 仲地 正陸



山のふるさと合宿かじかの里学園を見つけたのはちょうど20年前でした…。

東京のゴミゴミとした…シティーボーイズな地元の生活に飽き飽きしていた小学6年生…幼なじみの友人とひよんな事から上野村の「山村留学」なる興味深い参加募集の文章を目にしました。どこでその情報をつかんだかは今や覚えていませんがとにかく！なんとも興味深い…親元を離れそこに集まった子供たちと1年間という案外、長い期間を共にする。そりゃあもう、血沸き肉踊る！そんな気分を感じたのを覚えています。だって「毎日が修学旅行みたいじゃないか！」

そんなイメージでした。

事前合宿を経て、1年間の生活を決め上野村のかじかの里学園に到着。不思議と不安や心配はありませんでした。とにかく「かじか」発見の頃から血沸き肉踊ってたので楽しみで仕方ない。いざかじか生活が始まっても、世で言うホームシックなるものにもならず…夏休みなど長い休みも「かじか」に帰りたくてしかたない…なので親もさぞかし寂しいだろうなあという感じ…。というのも、「かじかの里学園」には1年の「生き方」を自分で決められるという大きな魅力がありました。週末は何をしよう？デイキャンプ？洞窟まで歩いて？暑ければ川遊び？それともゆっくり勉強？読書？とにかくやり方、捉え方次第では「自由」なんです。楽しみ方は十人十色。自分はココで、キャンプや川遊びなど「野外活動」をすることに重点をおきました。やはり、上野村という自然に恵まれた環境ではそれが一番と子供ながらに思ったものです。しかしながら、それぞれに「生き方」を探せるのも「かじか」の魅力。修園した後も毎年夏になると上野村に出向き、かじかの里学園に遊びに行き、偉そうに「オレサマは1期生だ！」と自慢してみたり、川原で1カ月キャンプして「まだいたの！？」と言われたり…。自分の人生の3割くらい？は「かじか」に関わって生きてきました。

そんなある時に運よく「学園で働いてみない？」のありがたいお言葉。それはもう思ってもみない言葉！学園で働いてみたい！と言っただけでしたがまさかのお言葉！これも血沸き肉踊る！「オレナンカデダイジョウブカ？」と思ったりもしましたが働くことを決めました。なぜなら、園生に1番近いスタッフ、園生の気持ちができるスタッフ…それが学園の子供たちにとって必要な存在なんでは？と思ったからです。自分が園生だった頃の思い、今の園生の思い、自分が思う「かじか」への思い。それが組み合わせればスゴイスタッフになれるのでは…。そう、思いましたが…なかなか難しいもので…今も試行錯誤中です。

そんな自分ですが、園長をはじめスタッフや園生(笑)、OBに支えられています。だから今が楽しすぎて仕方ありません。

またお会いしましょう

こじんまりとした家庭的な雰囲気の中で行なわれたかじかの里学園入園式におじゃまして心がほかほかと温まるような気分になりました。園長先生はじめ、職員、上野村、園生と保護者のみなさまに対して、取材に協力して下さったことを心より感謝します。

新潟のお母さんがおっしゃったように、密着した集団生活が楽しいばかりのものではな

いとは思いますが、対立することも含めてここでの生活が園生はじめ、関係のみなさまにとって豊かな実りをもたらすことを願っています。

園長先生から、「これからが楽しい。夏も冬も楽しい。修園式が最高です。」と教えていただきました。再び取材の機会を持つ予定です。それまでお元気で！

《取材：倉林、藤原、下田》



山のふるさと合宿 かじかの里学園

〒370-1617 上野村大字榎原 229

TEL 0274-59-2137 FAX 0274-59-2327

<http://www.atcfactory.com/kajika/kajika@vill.ueno.gunma.jp>

主催：上野村教育委員会